

古月里



和書門			
類	號	函	架
二	八	二	一
一	一	一	一
冊	架	函	號

庫文閣内			
類	號	冊	架
二	八	二	一
一	一	一	一
冊	架	函	號

(二七九)

七十二



内閣文庫		
番號	和	28420
冊數	100 (72)	
函號	211	300



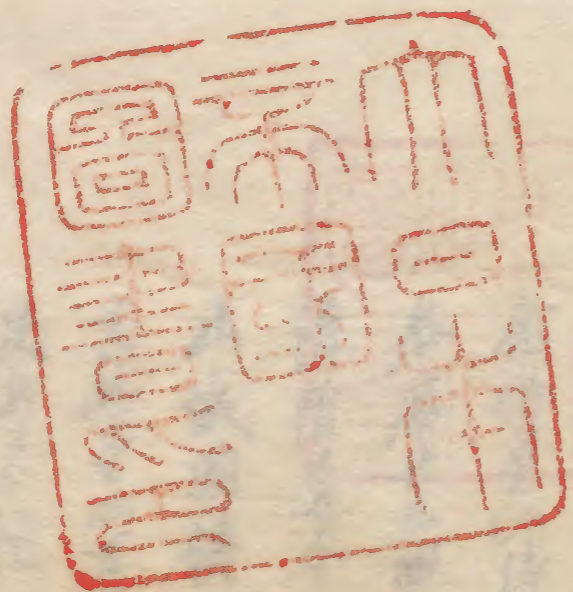
Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak





明治十二年七月二十二日

明治十二年七月二十二日

塩尻卷之七十二 享保



念佛堂の待舟上人

恭唐廿三回の御忌辰

清僧道本和尚

山城國倚田村

去如堂二万日不退轉を云

足ある蛇

吹上御殿より証と別名事

法祥寺本末の合

寺に在る古僧の危長の話

春唐かまきり寺の御代後

瑞峰寺御縁一因忌

辛丑正月大化寺一僧

家の称号を各寺と傳

因國祝園柞の森

多武峯一庭惠和尚

熊野権現出現年月

高嶺かぶと

東武忍岡菖蒲院

辛丑傳説大沙五百圓

名所の秋の歌



六つ名の妙法記

江文の神

延喜式金銀箔泥

物と盗て取ちて法を法

称号と法を法

摩斯叱

神社の多承り

餘

法作は才三字才五字

東瀛は云十字

舟藤別当の石塔

寺の訓

孝徳帝の詔

毘杖

唐の訓

櫻路

法州言頭用山福社内布

台まをわ

法画二字は法字

或傍は法を元敷

少組風俗

土佐家絵所の祖

和画の大物

梵修庵の巻

三州水戸山より地出を撞

宇野の郎の子熊光

萩生氏の巻をる巻の法

尾山五村地出を井筒

敷盛の室

寛文三年勅を能の図

雷まうりりものを掃せり

初種

令曰先好後聖

勝内海大出巻を巻法

和訓を王仁より始

長柄の櫛柱

供より志徳丸

成信重家出家の事

○念佛堂の上人

待舟

英徳國少洞の山を真性蓮社

又退院せしふ自法なきむのいふゆきし名跡を
せりて送りし侍り

まるまゆくまぬを山の中のみ

わらわら好まふいさばりしのみ

訪舟老師山隠之居

拂袂松風笑獨清 柴扉期待紫雲迎

幾年忘了人間事 眠對層山聞鳥聲

○瑞澤沙汰一廻の忌 五月廿五 香すむらさき

物もも思われ侍りて

まろくまゆきしはなれに

布く舞くをゆく五月雨のくさ

○六月五日春廬北三回の法忌辰^一三日の晨より漸
淡経作ふ^二よりより作りて法寺もえあり作良
田舎堂庭て^三く世の夢を^四て^五空林月細^六
光陰の^七く^八白雨の^九社^十
作り^{十一}も只^{十二}妻の^{十三}法忌の^{十四}や^{十五}おかし^{十六}

むき^{十七}おかし^{十八}法^{十九}おかし^{二十}

おかし^{二十一}おかし^{二十二}法^{二十三}

おかし^{二十四}も^{二十五}法^{二十六}百^{二十七}通^{二十八}おかし^{二十九}
光^{三十}位^{三十一}を^{三十二}莊^{三十三}嚴^{三十四}も^{三十五}末^{三十六}の^{三十七}法^{三十八}おかし^{三十九}
の^{四十}法^{四十一}おかし^{四十二}法^{四十三}法^{四十四}法^{四十五}

おかし^{四十六}と^{四十七}刹那^{四十八}生^{四十九}滅^{五十}の^{五十一}謂^{五十二}を^{五十三}おかし^{五十四}
思^{五十五}を^{五十六}形^{五十七}順^{五十八}逆^{五十九}の^{六十}法^{六十一}おかし^{六十二}
き^{六十三}おかし^{六十四}利^{六十五}名^{六十六}も^{六十七}おかし^{六十八}
く^{六十九}おかし^{七十}彼^{七十一}水^{七十二}使^{七十三}を^{七十四}愁^{七十五}者^{七十六}皆^{七十七}嘆^{七十八}く^{七十九}法^{八十}の^{八十一}法^{八十二}
法^{八十三}の^{八十四}法^{八十五}法^{八十六}法^{八十七}法^{八十八}法^{八十九}法^{九十}

法^{九十一}法^{九十二}法^{九十三}法^{九十四}法^{九十五}

法^{九十六}法^{九十七}法^{九十八}法^{九十九}法^{一百}

○此春^{辛丑正月}尾南知多郡^{根戸}於^中禪寺^有の^僧
春雲火化^をく^く奇異^の事^一作^ふ
法^二法^三法^四法^五法^六法^七法^八法^九法^十

剃髮し文をも學び行をも練く今法を本原にせし
しとて凡そ上古の名徳控方なきもあはれ神
季世の劣横いりて是を倣ひしゆかき丈夫とい
我を凡そそのゆりゆりのいしく形もしく堆暢
鬼は惱まき魔の劣る奇特を現せしものなり
夫亦は控方の志ありて人志ぬ山谷もあまかる
村落の中は事を生し臨末の問答もいむむいしく
穉世の備も亦名聞守りしゆかきに造化は互り
かへし神子の事ありはゆりゆりもあまかる
業報の果もあまかる

○或曰我國火定三昧の俗ありや曰扶桑畧記治曆

二年七月十五日の條は四條坊釈迦堂の住僧文豪
於多詔野焼身とて亦元亨釋書に吉備宮に
祖友隱色傳の東の聖の外焼身の人ありとて爰思
存思ありてゆりゆりは近世東詔して神感の賣子
焼身方のゆりゆりて大に焼とてゆりゆり人の物語
も是岡坊ゆりし事保元元年東詔南大久保なる
炎燄派の俗火定とて自の蒼と焼しを形民火とて
消傷を引出さし板火のやうにききゆりし極有目是
とゆりゆりし狂氣のゆりゆりききゆりて免きまゆり
予其法名山は有る受持し

○清僧道本和尚を南条の人享保三年我國に造化

きしきし 舟中の作
白

吳湘江口上 櫓幢

千里惟憑五兩風

山無無情分 去住

鄉關何處望西東

乍飛彩鷁搖銀海

坐看洪濤撼碧空

尚喜此心如楫木

見聞總屬有無中

留別

跡寄庭南三十年

多君意氣每相憐

長期共說無生語

却為離群斷河緣

雪裏行裝添白髮

風前相憶對青天

函中佛法今如線

遥望吾儕作仔肩

博 て 道義高 く 子月 子 藤山の獨女

禪師 清僧 よ 公教 く て ま 本菴禪師

笑 た 代 り お ろ 法 法 衣 き け け 神

る ん 接 ぎ ぐ 授 け ち ま 名 名 後 の 好 好 因 因 縁 縁 有 有

有 有 土 土 の 弟 弟 里 里 庭 庭 を を 見 見 る る 一 一 ら ぬ 國 國 人 人 も 因 因 縁 縁 有 有

を 志 志 する る 一 一 物 物 一 一 付 付 り り 也 也 因 因 縁 縁 の 志 志 を を 一 一 庭 庭 へ へ

身 身 を を 終 終 る る 身 身 を を 一 一 付 付 り り 也 也 一 一 付 付 り り 也 也 一 一 付 付 り り 也 也

の 三 三 億 億 を を 佛 佛 立 立 世 世 一 一 身 身 一 一 身 身 を を 一 一 付 付 り り 也 也

一 一 身 身 一 一 身 身 を を 佛 佛 立 立 世 世 一 一 身 身 一 一 身 身 を を 一 一 付 付 り り 也 也

邦 邦 へ 志 志 法 法 の 志 志 一 一 身 身 一 一 身 身 を を 佛 佛 立 立 世 世 一 一 身 身

管 管 僧 僧 侶 侶 の 志 志 古 古 一 一 身 身 一 一 身 身 を を 佛 佛 立 立 世 世 一 一 身 身

一 一 身 身 一 一 身 身 を を 佛 佛 立 立 世 世 一 一 身 身 一 一 身 身 を を 佛 佛 立 立 世 世 一 一 身 身

一二たゞは方々へ後世滋惑の爲に佛法を市して自
慙愧のたゞ改行して又俗なるかゝるにのちて未法の
劣穢然生淨土の要口稱念佛の勢の形ひりく
きありしは是れ北村にあきりて三学分肉は謬を得
んゆゑかたつり形は侍ふ

○和俗の稱号を名字と依是と至世名と字との事
う心得あたぬ收事として苗字形なりかく去却く
得るなり是を津波武家の出方なり其郷里
本貫の名田の字を呼ぶる名字と云 伊東天野北条
名あり 人の
名と字とを呼ぶる事と云 一条殿左衛門と云六波羅
入道藤原右大臣のあり

公家の稱号は前山院徳大寺なりは法を苑山院氏
徳大寺氏なりといふなりは近世名多し氏を添へ
武田氏と尾氏なりといふも古書に在る事也 此法を
是を姓と書 林家の字と姓を林氏なりと記さる
いふや姓氏を看しり勅授の事と俗にものささる私
に氏も姓もいふ人も忘將の多きの事なりは
才也俗学者は此をたまたま唐風の詩なりと似氣く
倭号なりとも雅なりは俗に姓と云ふなり是れ才のか
なりゆのいふ其書の名をいふなりと見まき何右馬末長
流なり近代和俗の雅なりぬるは俗なりと云ふなり何と
唐風なりといふは居題詠は泉州の商人唐金屋

炎傳然素一信... 坂本西教寺の八重日の回
向... 世よきをいひ... 世夜の群集...
... 京人... 隔て... 南世... 茶華
園の... 佐河... 佐喜一信

○ 多武峯妙樂定惠和尚 大職冠長子実ハ天万 豊日天皇ノ子 善哉西

八月三日 遷化墳処在山城國木幡寺辺云々 一條禪
樹涉撰の大職冠記云々

○ 世よ地よ足あるもの中れよあり... 百練抄保安三年
五月十四日の条云故二品物五白川堂 若緒云 前庭有足地

出来為犬被喰殺云々

○ 熊野権現を孝昭天皇二十五乙庚寅三月十五日
涉出現云々 大中臣日記 崇神天皇六十六年己丑出現の説
云非ちらん

○ 丑四月四日 大樹吹上の別涉所... 涉自民の訟を
元々十 五品 有司取捌云々

○ 菅蒲かき... 元右石おの蔵... 追手... 重根の... 大... 本偶
人... 村... 銀... 有司

令を市井に於て制有て曰

一 舊爲甲立物計一箇並百事

一 許志を何事も墨塗より仕致をさしりきんぶ
之に許し申しんが彩を下し事

但減物数と包の中留事

一 槍長刀をく並力る事其外ゆり彩を甲因根に事

但人形を無利事

右跡上之舊爲甲をりし事も此定より下りし
仕員を、是より難相なるに唯と述用ひ其りゆ無事
不存と

丑四月

亦も世の費かゝる事程多かきぬ齊く太平の
化をとりし人端り美ツ銀を考へし清浄なり
なりとらんぬ

○ 月一月の令と曰

諸拜千木^{チキ}形古子傳り以修護系分管内にて
振、月以、後長く侍りぬ、其長向へて下被
在解りし事

丑四月

權衡を天下の輕重を以て定まらば、
在子^{カリ}よりかゝる事、其も侍りし事、
制ありて私に侍りし事、古より禁せし事、
尺を以て

てハ布帛を七種少一のものを害なきありて制法嚴
たしく此是神代々の尺ノ概なり此在國の古制亦亦
律原多揮よるなり

○東武忍岡坂本の善玉院者天台の古院といへ元を三
明院と稱す一慈眼大沙東叡山創建の日自の檀那
と云く此寺も檀那なり 此非田舎及び此寺古系の老僧二月法
を坊よりて此所あり昔の俗名なり
然る小一旦鳥丸家の息院主の時形も邪義と云く
非法の事を勤むけ在る者子日野家の息も亦
僧形も亦小遠流に砂をくま三郎院の形流を天下
少禁よりよませ 揚州大坂天竺寺村
同形流あり 其後寺号を改て
揚武院と号す 此車坂あり一云極大寺あり一云号あり一後
此の地は移り其係を子なり女古寺也

本尊釈迦迦葉阿難の三軀を清和の佛工の他珠
切年々月檀越對馬中村が寄附し又夫中興も
真言も立川の形流 無恒國師のころ
此流を云ふ 天台も日蓮も異流淨
土も一多義の所解禪も亦も俗のありきも俗を世
亦名判も三郎の形流禪ありて正三の形禪ありて世此
中より如く森田法橋 云素
法也

○真言家も密嚴安養不二の義と立亦大日跡勒一休
の説ありて別報懺率の往生を修し此日河州九
華山六陰沙秘密安心往生要集二卷と筆し
志きりに生天を勤むるは修り是元より邪義あり
他一香世の中俗を勤むるは安養往生も亦俗

らんや無相院大僧都 亮甚 謙かき

右二条去冬忍岡より一厨穿り交也彼西人より
此妻をの形おとれりかたかき事もいす好く
筆一巻伝ふ

○享保六年丑六月四日信交大師九百回の聖号を山
門の末寺國々より登山せし信交珠院僧正の
いま乞ひかきし信交く法山よりかきかき
信交くくも業條の秘思ひされ信交くく書
すてぬ世おくくすにふくく五月日

雲はれ山々山々を去りて
三日の夕日法信くくおくくお付の念佛唱信交くく

淨土院又勅云信交くくを岡信交くくもた

おもいぬふ山法嚴のそもみくく
杉立洞おくくのた法信交くく

金線蓮より山荷花と見信交くくも彼見金蓮華如日
輪の文と郭をい出く

おかりくくおくくおくくおくく
西よ入日おくくすくくおくく

四日のおくく香と義かき
大鵬搏風冥海吼 怒声震起走龍蛇
涼雲洗出四明月 沛雨新開五嶽花

来てらるゆへ忘の月は何のたより物言さしめ物言
きり教へて吾子と手を一行程の甲子満りたに初夜
の笑も有るやうに今もいふ事さうさうおきて打さるる
いし情状一とくも各番うして費をいさつたて
名一平云元人満の賀むいしとさる此令をうしてその
後より南極燧烟よとをくよつてははれはれは村の
君其言難と笑しつらるる月一物まはる事なり
今も詩歌を詠んで末の才もせくまらるものと
せしよし 代々の撰集源氏
物語にあり 若世日にもありはるる花の賀
林をひ葉の賀をい雪の賀をいひくいと難なる事な
ありし元四十の賀は元良親王の枝の葉と紙一真信

公の佳付傳くく治民の要より五十の秘教管家の
りてつらきなりあり清貫の困越共よりなり法具院
兼家の撰改六十の算と常寧殿は賀をいり右東三
条殿の法交なるなり七才と賀して水石亭の法交を
大慈若行より盛りの七秩の妙を得く梨壺の才士
素を教へる清慎云のりてき徳なり清和の皇
女七之八旬の法交は重なる縁と因く貫之の紙を
箋せしと花山の傍に素條の三位九十の賀を殿上と
綴りしも傳へ多かりは従一位貞子 治承本國の秘教と出川
と号後深草院御外
祖母九旬の香百僚稱賀を紫衣を傳へる法を長き命
のかひありて咲花を改の萩ありてと世のむし此物に

あしりてくちくちと音讀みよやくとてなき世と移り菊の
昼よかりぬ枝をめぐり候りなき子よの世と君小り
姉はまゝとくちくちと音讀みよやくとてなき世と移り菊の
田舎のあつたかきつかりのりききやうり迎ふ時や
笑へばすべしなほまゝとくちくちと音讀みよやくとてなき世と移り菊の
吟のありく華麗を陳金燈を張り宴を設け
音聲と盛る縁糸を個言く回雷風意は得と妙に
國画と信し存す互ひは群衆を競ふあり金玉を
飾りて跋讀の祥具と候しあるは光園樓榭とく
芥曝と候し滿堂終日歌唱し合は蕃斬り清り
ふと世に國も是とくちくちと音讀みよやくとてなき世と移り菊の

清て暮客と云々―嘔啖沈痾嬉々雷回と云々
次男は夫生日を母難の日とて子乳をおろし愛若
まのうはばきとくちくちと音讀みよやくとてなき世と移り菊の
あしりてくちくちと音讀みよやくとてなき世と移り菊の
と安んずるを云々今郎罷萱親の事ふと云々
夙木の悲やにあり痛極しと云々と毎をんとして
由らく其幼勞の諸息を抄録しにまの不幸の重罪
と懇射す何れもは是をとりよは北日ハ社と
うまゝ涙をくりに只身と云々とおし萱此世とくちくちと音讀みよやくとてなき世と移り菊の
経と奉す次男一事と云々と原の抄録を録して
聖大經の王孫相論り一百二十家のおのめきと

よるこも清く且清く肉清く魚毒殺治具
して難おと延き石法破味也すや具夜下は
あつに謹て流す可也とち子才是と信て秘多ん
すも部くを穢くちんすてお思等いすは禮
なすも辰門下負笈の人も信は是其書して生日
とさし信り唐の文皇祿善の宴を説くは
子老情と越さしを秘きお後白川院六十の涉笈
せきもあつてそくほけつきたる妙法經を後
すしくらんもさき海くさし清志あはは中思の是
と學しつゝか帝もすもおかけおく信る只此日祿事
の念もさきかつらつたふも猶談經放生して父母生育

の母よんてさきもいふとさきつゝらんもはかくも
昔もつゝおよあるもねをんきりり今 彩七を
君を信のるを三かをいふつゝも言き松原松くつ水
例えりもおのつふもあははさるるも信意も難
く九思ひくかつゝは形く

くち抄ふ老あしんて抄をへん
志らまおしん 松く松原

きれもつゝ此月暴風流流のさるるもさき高を侍
しておのつゝりりさき流の男女の隔り流さうを信ま
南部いさく山也もさきかぬ折くは是と母のよは小
くつひつ小公のき形くおの秘ひのよもさきく物し信ん

や通あきな存しけりいあまも人の為は破船を備
むらうりの力せしうくさく物をもき猥穢くさ
まもひえむらふり年段きはまふむ月日を好く
うりて鏡の面影をのりく終小藤條の効く
傍に犬日のおもてしをふはしきほぬまは雲に
すらふ蒲柳の質何をせむくもの末のちをま
りしき 及あまぬれりうすりむしる田のふは
まもいも何のいのらん 二条大皇太后
大武のち ままうートあ
きてーれきこえと男を控て

むしる田のいりぬき月のいりぬまに
かいらおのちのかちやあつてん

若松系著て去のう世のむしるをく塵かき
せうまうーとるはしむいりきや人のよし物
うーく花やの形あまうりいりもあつてん
いけふ但貴介の海軍ハル也さうそち末のちを
かちてまはもー期あまうあつてん
排拵しそいさうき午一侍ふまゆぬく侍は
ふまおろの形ふ能方おろのうりて老ふ
はさちまやうのーおさう証跡をもよあま
まうりさう袋をつきく世もあつてん
よ廣厨百保本の長かーんゆき祝ー甲子週ー
鶴等と好くさの古掃のま牛函実の花ふ侍は

華化文をふんじく十通の志を侍百通を授けしむる
もそ徳を種し其切を稱せしむる事よむるが故ある
命ももろなきふ流校の方なく月けしむる事よむ
あつ方をきくわいたす世ふのる存もよむるふ死
あつらる身の何ぞのほきのしむる事よむるふ畏
しむる事よむる事よむる世のしむる事よむるあつ
ありす事よむる南苑の終とうしむる海庭の筆をとそ
しむる事よむる我こそ浅くしむる事よむるらぬ者の
命をあつぬうき世はたのしむる事よむるらぬ者の
終拍しむるむお紫も体以紫のたけしむる事よむる
あつらる事よむるあつらるあつらるあつらるあつらる

あつらる事よむるあつらるあつらるあつらるあつらる
あつらる事よむるあつらるあつらるあつらるあつらる
あつらる事よむるあつらるあつらるあつらるあつらる
あつらる事よむるあつらるあつらるあつらるあつらる
あつらる事よむるあつらるあつらるあつらるあつらる
あつらる事よむるあつらるあつらるあつらるあつらる
あつらる事よむるあつらるあつらるあつらるあつらる
あつらる事よむるあつらるあつらるあつらるあつらる
あつらる事よむるあつらるあつらるあつらるあつらる
あつらる事よむるあつらるあつらるあつらるあつらる

真保七子 永三月の初

白雲の詩

志存心は空を
あつらる

○ 寺をてしつ訓するを照堂の意をてしつとて
しつり言塵集又宮寺の古語をてしつとてしつり
此類は書小後し

○或人江文部非くく神を何くく長岡為九子母く小
云江を衣也文ハ念の義くくして食の事也衣倉の非
くくして保食の非くも倉猶魂くもくくくくくくくくくくく
抄きくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
不知くく可矣可哀又巫女の垢を移るは穢也すくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
起る凡非をすくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
罪をおくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

○孝徳天皇詔て凡犯者若の髪を剃所くくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

○延喜式云凡金銀薄泥不得為服用并雜器飾但
五月五日諸衛府甲冑之飾不在制限

伏按昔日朝家禁嬌飾如此季世無用費弊多
豈可不禁固云五月五日甲冑之飾者是今日
端午兒童所弄菖蒲冑之本歟

○新年兒童弄毬杖是異朝擊丸之戲也韓詩所謂
毬聲杖奮合且離是也又古詩云毬杖交加錦綉
衣毬杖之字猶多倭俗謂之擊珠是尔韓詩云霹
靂志乎神珠飛異邦固称珠

○中世我東冢の國くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

摩拂以新以多き大徳其他の佛具をりく奪以
取く我寺に奉附せりて大言せりて後人皮く
切徳よありは悪行せりて多し予思つて古今
西与郡牧民とて治りて物を取去りて溝壑
よ新せりて多きをあまきと申すを好く彼民より
物よん神祠とて多きを佛宮と作り困りて諸各を
僧法海は布旅とて是と切徳とて治りて是彼悪俗
の志よんたを若きものよすて道とては義を并
きまじ大なりける事との多し僧法海を已に利あり
他よんたを多しなりては和とて多き義とては世人
彼よんたを多して宝とすつる人私徳も我寺人

々々痛むるを以て也

- 唐とてえたがらと和訓ととの俗儒をえをりて談
とつて新しきをえの切せりて切音小談の名に
よりてあまきも唐とてせをりて談とては神代の俗
小いと切音よすりて所多し直音切音抄語音便と
てははる書を談は俗なりとの有る也
- 稱号を諸家よ切らりて秀吉以前をえりては
唐よんて國の代述を帝王の姓とにりて切らりて
例よんては漢の高祖善教と劉氏と切らりて
唐の人主益は法とては

○ 西域記云在頭曰瓔在身曰珞

○ 摩斯叱 此言_二猕猴_一

按倭俗以_二猕猴_一曰_二摩斯_一者即梵語歟

○ 流妙高頂の南からあるところの山所の八幡社の境内は
是竹ありと布の太ちるもれとて園四五寸ありて
七取葉生し傍ら八月旬を生く本多沼目及布織
しもえもあし及布と傍ら山麻の曼陀羅ふけし
軸一節一丈餘あり是と東福寺村ありし神物の
たゞくして南廣嶺笛布を一節丈をくしと時珍
といふく不思議ありと云

○ 神社の名もむしりし門はひく多居といふ所りし
伊勢神宮の一二本の名も才一の門才二の門は古き

まにこりし但亥飛ニ色の太政官符より内外の名居
たもあきし判りのうもいし所りしと名居りしお毎りの結
訓と云ゆれりも酉陽雜俎より東門鶏棲木といふ所り
是多居の言も等しきと云ゆれり昔神社の衡門は
鶏を名居りしと云ゆり鶏棲の名あるに云ゆれり
居るまの古き形もたて天の敷くし亦多井と云い
所も也花巻と云ゆれり花巻は門ありは只神
社古伝の判りし公伝は不可なり様々の理伝と云い
其のゆりしを云ふ也

○ 紅花 一名紅藍花 和名今れをわたりし名もては其の如くは
くて今れの藍といふのすなり本異國より傳りし

たり兵布一兵被の~~~~~
 別物ナリ

○ 鰥 介菜字同見蒙州老君碑元贊所書の題字
 鰥水鳥の三字有て医徳計を重んずる事少利由と

○ 元菴の謄也
オウ 音鳥 軟美 タウ 音曠 平声 テウ 音推 上声
ハツ 音揣 同明
 此等の字謄字を一字とみる

○ 詩を依りて三字才五字或平或仄換は凡そ一用き
 七六調より或人元贊の同ふ古人の詩多く見存りて
 平字を用ひ仄字を並べし何れ元曰夫ハ排律の格也
 凡詩を答答又断りて初一の也排律を樂し

用ひて文字を爲すは立身計りの体形りと各
 ~~~~~

○ 或僧書翰を才き元贊は凡そ一書と定むるを  
 の寺の事と申し元曰是記の体也本條の注ふるに  
 又素の字亦有る付の事也おのまの書は其の字甚  
 不可なりと云ふ

○ 東鑑は十字ありと人修政の事なりとありて万ハ  
 非なり 撰記其代ふる事一是蓋飯の果名なり  
 晋書蓋餅上不折十字則不食と云ふ 蓋飯を麩を  
 醜みて伝き物由は縮なり今長崎市人製りて異  
 非山西の奇阿茶館人の書ふ是とハンといふ



○ 八潮風俗古家國のりより一糸様客の記は凡侍  
今柳堂が跡を尋ねて法華法教の  
たし元山の如く神のまゝ京をり廻りて難波を  
意次郎の枝は彩雀のまてきりきおくりし  
すのち外の國はかゝりしも笑ひあはれ

○ 相業武性 崇仙寺は府前別當慶盛の石塔あり法  
名加條系院志河弘法佛

武務の永井は実業の位をりし此寺彼居の  
塙

○ 土佐家の祖は信所従五位下土佐と藤原経隆也  
其後哉前も行光と子越前も光重其子土佐守廣

周彈正忠 忠清は信所より行りて廣周の子刑部太

輔光信は土佐と藤原のりし人刑部守中 其子土佐忠光

氏刑部守中 男子とありし其女子物野大炊介元信の男

娘とありて信所預りし其子孫と繁昌して幕府

も侍し今土佐家を其子孫と繁昌して幕府  
飲より老の裔信所官を留りて信のりし

○ 和画の大方りの昔東大寺ありし古記に見ゆ  
と名古くも見る見存の大画を洛東に後与涅槃像  
明兆殿目の筆として監三丈九尺横二丈六尺経世の  
画圖有り其他同寺の法堂天井の絵も亦兆公等の  
筆とあり紙甲して破りて後物野光頼本姓は本村  
始此永徳

清子 板為小是を画し診臥二丈臥其身を十丈  
飯崇長中の

○村上天皇の海守樋口の中詔雷の逢く中死生  
ちりし醫師志明灰をあつめて是を埋せり樹と經人  
人々地を返りしり二番物産小あり

○今をおりて神多野野より白く焚燔菴  
身をいつれ者なりのおりて  
くわくわくそのくく口解り傳名なりをり彼後  
小野赤社に崇祀し煙宮なり

○神と祭りたり幣と初穂の何しと田稻ありて収め  
ぬき先本居の神と敬りしと初穂なりと

金銀及泉貨を初穂の何しと準して終りし  
と一揃ひに三代愛知の欠銀十二百新銭を  
早穂二十文ありて初穂なりと  
羨妬也

○予父古世より一河三河國海油の難南水戸山は  
村民堀出きりて初穂を各府に携て来りて公府  
に納りしなりと依りて是を盛り民に根を  
細くし形瑞公の亡父曰昔三河國渥美郡に阿育  
王の寶澤とありて終延と敬りしなり三代喜徳  
尼の其高き三尺なりと今銅鏡なり是  
我國の製家なり是阿育王の古物なりと

但かろるの中上人をいとおまの事なりとて今も諺に  
しと後少なりし事なりとて思ひますれ侍りし年  
經く東よりり外山法印の業を寓し侍りし法郎の更  
諺に今此法郎はとて諺に法郎とせしむる事あり  
しとて立かりし老ののち初めたりしはとて女をいさ  
濡し侍りし

○令三曰海公奉勅 凡先好後娶為妻妾雖會救猶難之  
云々夫女を嫁する法先祖父叔父姑兄弟外祖  
次は舅従母従兄弟亦は告禮を乞ふに嫁娶す事あり  
令よりゆきまを礼を乞ひて娶しむるを好し後をく私  
に共ありし後祖及び父およりて已に婚娶するを其後

好む私事と發せ侍り老ををくは非常の救ありとて  
形示難きとむる右大臣長野公の江解は凡の古へ  
吾國婚姻の禮西交りしと凡の海へ

○宇野六郎赤松光範 子熊五九名楠正俊は父を討て  
其他を報せんとして光範といひぬかれまを志を感して  
一刀とありしと極く赤板城の軍學を討りとかくして  
正儀を侍りし弟友重を討りし正俊もらうをくす事あり  
初めころは懐ありし父の仇忘るしにあしむる事あり  
懐はほくすれ月日を送りし父の七回を思ひ切て宿意  
を遂げんとすしとて日にも正儀を討りし元徳とて和田  
如承を島帽子執りし和田小法師正覚と名察せり

正光河小むぎひのつゝさ女信のりかたの思ひ  
と譲り君は仇ありて信一様も口信く思ふる信に  
白くきて志なきと矢ひ一只と君の為父の為は自死  
すまより亦道行一とひ刀抜く自殺せんや  
今もおろなき取返りかともしや浮世は信なき  
若くは其刀にて盤切控渡御生信は入るに  
夢渡りとは正光法師にておこなひすまより  
古き事小凡俗

儒者よりいふこと正光は振奮してりし  
信ある人おまこといふこと

○尾南野間内海大湯堂寺 大坊 中興長命法師也

東照宮母公の御ふりて孝長と申 神君は寺ま好め  
何のいふとも是ありて信なきこと一作ありし長命我  
由の風はあはれ信ありてまを公のすく小麻呂す  
地を信法師はあまのしやと申 神君思ひの亦小  
おしりしやと申 信法師麻簡及以小香の信法師と  
命して有司と申 信法師 実よ不律乱行のゆゑ  
次の秀法師法師あまのしやと申 彼簡法師を法から  
其次信法師法師住持の村成流正虎彼信法師麻簡と  
乞て彼法師は信法師小香法師のしやと申 神君小香と  
○萩生氏の訣文笠蹄曰和國殿取胡盧島おのふ丈夫  
の糸乃ハ助法やまのしやと申 神乃と申 神乃と申

の如くおのれは唐者倭奴國なり。其を畧して倭と云  
後より<sup>音カ</sup>日<sup>音カ</sup>夏<sup>音カ</sup>の和の字は改む大和なり。大宋大唐の大  
の字は一一日本の惣名なり。山迹の國帝於の附大和  
と云ふは昔に於てぬと似たり。平安城よりして程大  
和と云ふは不學なり。其を按ずるに殿取胡盧島の名を  
丈夫のひらきなり。旧事記の記あり。又所云の記の古事  
記大雀天皇の涉製又日本の惣名あり。且延喜海  
記弘仁私記序の説も遠く。今唐者と云ふは六箇  
らり。小似たり。

我國古くより傳ふる夏の名をも前後漢及隋唐  
の考も於也。今明清の國音は大方元は其難音と古

くこの考もあはれききとを意先大沙傳來の列声記に

經と唐音法より今是漢音也

○和訓を百濟の王仁より始なり。王辰のひは定ふ漢書  
の字音代々を歴く。長漢報通なり。桓武天皇延暦十一  
年諸生よりして漢音を考へて。む因十七年勅して漢書  
の考其音を判りし。のち一一む大正より。大學寮及  
各國の學校皆漢書を判りし。永安以後是河入宋。明  
唐陽乾の法より。宋考亦り。道隆元唐古。延喜古の  
禪僧多く來り。通經漢書風を是もさし。作し。朝廷  
の文官程者。其考を悉き。世に漢人多く。七音より。其  
國音を傳ふ。けむ。七の字者。其考を好む。奇を銜以

一高の門を立在國古昔より字少々の字音と和風の  
俗流のといふことと和訓助考の刻を控へて以清の音と  
しつゝ及漢の字を悉く詞意をのりしむる皆新考の私  
考也

○下酒六月尾山系栗郡門乃在玉井村加茂之社境  
古き井筒を堀出せり天平三年<sup>辛未</sup>三月五日の字  
あり<sup>享保二年よりりて九百  
七十七年と聖武帝の年号</sup>井筒を丸くすむひんをり  
見ゆあり打木の製古代のりなり木をさきの木より  
○ ○ 形のこくくちり板十枚をむり  
玉の井の堀りして清水涌出古き木井中の水に  
付ぬまき久しく塩味ふもこと

○ 檜州長柄の檜柱參妙秀檜の本とを形堀出し傍  
相州築根の湖中大杉いづも傍りし人信州  
松本よりをき里<sup>松井村</sup>よりて古代温泉の跡より湯  
より堀出して湯もよき傍りし人信州より或  
有司云我公涉封内茨瀧國安八郡森於村は神祇  
の祠あり昔皇太神を敷年崇め奉りし一曰流るる  
彼地岩船宇治橋ありは古所ありしを橋の堰地  
中より檜柱ありあり是皇仁帝の涉宇なり天平の  
前より七百才餘存其昔の檜柱とを朽もたて人  
後世より小徳道の橋なりしより無残とも経てもなき  
幾百才の板あり終りにと程才より古き柱あり水

中よ担う一本を名をあるを知らしめて

○或問兵官大夫敷盛の妻涉彰堂とて扇を折初と  
去るのありやと云拙察使資賢の女敷盛の妻其夫死後  
祐寛法彰堂の園梨宮のありて折り刺殺して生一房  
如佛尼公の秘を新法光寺法彰のありて小一院  
と建う蓮華院と号して住せり一旦後法源院  
の皇子後法源院の王阿上人病のありてありて  
尼公栢扇を製し祐寛を以て加持せざる上人  
の病を拂とてやまると云新法光寺法彰平倉に  
ありて彼寺僧扇を折とて

○法彰堂をり檀林后の刺建なり王阿上人

以平時宗の寺をりしり

○俗に云真徳丸を猿樂の謡よと云法海よりありて  
謡の隅田川を梨園温故といふ事ありて吉田少将  
及野上の班女の事あり

此書百五十年とて一山宗の筆とて凡月附云の事  
あり

○寛正五年勅を能の園京師の古歌ありて  
今と同くは以樂屋舞臺の南ありて笛鼓の  
席田ありてあり

○昭中將致平致平致平致平致平の光少將堀川大堀川大堀川大堀川大堀川大の息光の息光の息光の息光の息光の息をりて若  
殿上人とて少将ありて一人をありてあり

さまの人々を憂ふるの斜を以て又て在の宣言を  
得るべきかとのふく床に物まわりの形を以て  
見く他なるも憂世よすの心もわらわらしき習  
なり節を以ておもひ後世を以ていひくお祈りたまひぬ  
お祈りたまひぬ信公任俊賢行成なまといひき方  
今建陣座にて事を以てお祈りたまひぬお祈り  
を以ていひく位高かたの心を以てお祈りたまひぬ  
身の心を以てお祈りたまひぬお祈りたまひぬ  
お祈りたまひぬお祈りたまひぬ何れを以て  
お祈りたまひぬお祈りたまひぬ  
長保三年二月三日中将  
少将三井寺出家 共々三井  
寺受祓阿耨梨の室より左中将成信廿三左少

将重家廿五と別之公任に此の事を以て行成大納言  
の申し談て給ふまはる御小

おまけに人もありける世の中は  
いづれを以ていひけるはる御小

いづれを以ていひけるはる御小  
おまけに人もありける世の中は  
いづれを以ていひけるはる御小







